

疑ふ可らざる所なるべし、果して然らば開成五年一たび葛邏祿に投じたる龐特勒は、舊唐書廻紇傳によれば其の後安西に出で、可汗と稱し、磧西諸城を有し、其の後嗣者が可汗の勢力を失ふに及び甘州に據るに至りしものなるが如く、新唐書回鶻傳によれば、葛邏祿に逃れたる龐特勒が自から可汗と稱し、遏捻の西走したる頃に、既に甘州に居りたるものと見ざる可らず、此の如く兩書は龐特勒に關して其の記する所を異にせるが、思ふに此の相違は、舊書を約筆せるに基ける新書の誤に外ならざるべし、何となれば開成五年の分散後、安西に入りたる回鶻が、會昌三・四年頃には既に勢力を其の地に得たるものなるべきは、先に見たる李德裕の奏言及び冊府元龜に、烏介可汗が勢窮るや、安西に行かんと欲したりと記せるによりて明かなるべく、當時此の地に據りし同部族が勢力を有したればこそ、特に之に據らんとして逃竄を企てたるものに外ならざる可ければなり、而して龐特勒が初めに逃れたる葛邏祿より更に安西の同部族の間に移りて此の勢力を作り出したるか、或は安西回鶻の盛と成りし後葛邏祿より移り來りしかは固より明かならざるも、既に安西に據りし回鶻の一部が勢力を有するに至りしものなることを認むる以上は、他に有力なる反證の存せざる限り、龐特勒が此の地に在りしことを記せる舊唐書の記事は、之を認めざる可らざるものなるべし、されば新唐書が此の特勒の安西に在りしことを記さずして、直に甘州に居りしことを記せるは、要するに舊唐書の記事を約筆したるが爲に外ならず、而して又舊唐書の記する所を解釋すれば、甘州に入りしは龐特勒には非ずして其の後嗣なるが如きに、新唐書には龐特勒自から甘州に居りしことを記せり、其の何れが是なるかに就きて亦今之を判定する能はざれども、既に新唐書が舊唐書を略載したるに過ぎずと見る以上は、之も亦新唐書編者の不用意の間に起りたる過誤と見ざる可らず、但し通鑑は特に理由を附する無けれども、此等の兩記